
キース王国の一本道

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キース王国の一本道

【Nコード】

N0017I

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

記憶喪失の少年と、魔法使いの少女。二人の出会いが過去から繋がる物語。過去と今と未来が一本の線でつながる時、全てが終焉へと向かう。王道志向異世界ファンタジーを目指して。

プロローグ

「おにいちゃん？」

誰かが話し掛けてきた。

ゆっくりと目を開ける。

そこにいたのは蒼色の少女だった。いや、正確には髪が蒼いだけのようだが。

「おにいちゃん、おはなし、できる？」

俺は木に寄りかかるように座っており、その前に少女が立っている。視線は同じ高さだ。

周りを見回すとどうやら草原を通る道の脇にいる事が分かる。

「ああ、大丈夫だ」

俺はそう答え立ち上がった。何と無く体が軽く感じる。

もう一度周りを見回すと、遠くに山脈がそびえているのが360度確認できた。そうして少女に視線を戻す。

「君は」

「ミアだよ。おにいちゃんは？」

俺が立ち上がった事によって空を見つめるかのように顔を上に向けた少女は、反対に地面を見つめるかのように顔を下に向けた自分に問掛けた。

「俺は」

はて。

俺の名前は何だっただろうか。

サカイ。

期待と、なぜか希望に満ちている瞳に、とっさに思い付いた名前を言った。

「サカイ。サカイ・エイムだ」

「やっぱり」

何が、やっぱりなのだろう。

そう思ったのも束の間、ミアは俺に抱きついてきた。

「おにいちゃんは、きよくそうしつなんだよね」

「違う」

さっきまでとはまるで違う哀しそうな声に、俺はとっさにそう答えた。

「……ごめんなさい」

抱きついたらままのミアは、俺の胸に顔を擦り付けて泣き出してしまった。

ここは一体どこだろうか。この少女は誰なのだろうか。そして、なぜ謝ったのだろうか。

山端に沈む赤い半月を眺めながら、そっとミアの頭を撫でてあげた。

第一章 事の始まり プロローグ

キース王国の一本道。ここはそう呼ばれる場所のようだ。

泣きやんだミアがたどたどしい口調で説明してくれた。ミアは一人旅をしているとのことだったが、その理由は首を振って話そうとしなかった。

「大変だね」

本当はそんなことと言える立場では無いかもしれない。だが、ミアを見ているとどうしても言わなくてはいけないような気がした。

ミアが一つ小さく深呼吸をする。

「あ、あの、おにいちゃん。……私としばらくでもいいので、一緒にいてくれませんか」

何もかも事情を知っているらしい少女は、何も事情を話すこと無く普通に振る舞っていた。

「いいぞ」

何の事情も知らない俺は、それ故にすぐに同意した。

俺は立ち上がり、それを見て歩き出したミアの後ろを歩く。

機嫌が良くなったのか陽気に歩くミアは、着ている服以外何も持っていないようだった。

それは俺も同じだが、仮にもミアは何カ月も旅をしてきているのだ。まるで近所に買い物に行くような格好でよくここまで

「私、今日の朝に家を出たばかりなの。だから旅ってどんなのか分

からなくって」

思わずコケそうになる。

「家ごと持ってきちゃった」

コケた。

家を持ち歩く。つまりそれは魔法ですか。

「どうしたの、おにいちゃん」

俺を心配そうに見下ろすミアは、何かに合点がいったのか詠唱を始めた。

「大空に住まう幾万の光の精霊よ、私の声に従い是者、サカイ・エイムの傷を癒せ」

まるで天使の囁きのような繊細で美しいその詠唱に、俺がほんのわずかだけ感じていた痛みが消え去った。

立ち上がって軽く砂を叩く。

「精霊魔法か」

「うん。らくだから。でも圧縮は無属性だから自力なの」

何だこいつは。

俺の驚きを伝えるために、まずは魔法について話しておこう。

基本的に魔法は大きく三つに別けられる。エネルギー型、非エネルギー型、精霊型だ。

エネルギー型魔法は更に細分化されて、属性型と無属性型に別けられる。火や氷、風などを発生させたり、空を飛んだりするのが属

性魔法で、雷を発生させたり、テレパシーや透視、召喚や圧縮などが無属性魔法と言われる。

非エネルギー型魔法は、予知や占いといった俗に言う古典魔法だ。精霊型魔法、つまり精霊魔法は魔力が無くても使え、精霊と呼ばれる生物に任せる純粹精霊魔法と予め特定の動作をするように仕込んだ触媒を用いるなどをする触媒精霊魔法がある。狭義では精霊魔法は純粹精霊魔法の事を指し、触媒精霊魔法は触媒魔法と呼ばれる事が多い。

後者は誰でもできる。だが、前者は精霊と仲が好くないと扱えない上に無属性魔法が扱えないという欠点がある。

一般的に難しいのは順番に、精霊魔法、古典魔法、無属性魔法、属性魔法、触媒魔法だと言われている。

ただし、エネルギー型無属性魔法には精霊魔法に匹敵するほどのいやそれ以上の難易度を持ったものが幾つもあり、そのうちの一つが圧縮だ。

物を圧縮する、と言ってもその物の形状や性質を保ったまま効率的にかつ持続的に圧縮させなければならず、家などという大きな物を圧縮させるには相当の魔力が必要だろう事は容易に想像できた。

また、属性魔法や純粹精霊魔法の中にも数多くの分類が存在し、その中でも治療が含まれる光系統魔法は高難易度に属する。

そういった圧縮や光系魔法を易々と使いこなす少女ミア。一体何者なんだ。

「おにいちゃん、あと少しで村に着くみたいだよ」

そう言われて先を見ると、集落らしき場所が見えていた。

「ああ、そうだな」

少し、ほんの少しだけ少女に聞きたかったが、それにはまず俺が

何者かを知る必要があるだろう、と思った。

商人達にはチェン（三番目の）村と呼ばれているらしいこの村落に存在する数少ない宿は、日も暮れかけたこの時間帯、全て旅人や商人で埋まっていた。

ミアの家を出したらどうかと尋ねたが、目立つ事はしたくないらしい。

どうしたものか、と一人で頭を抱えていると、一軒の家から少年が駆けてきた。

「旅人のお二人さん、宿を探しとんのか？」

俺達の側に来て立ち止まると、少年は僅かに息を切らせながら聞いてきた。

俺が頷くと、少年はさらに続けた。

「うちに泊まるか？」

「はい」

ミアが嬉しそうに即答する。

まあ、野宿よりはいいかもしれない。

「旦那の方は、それでええんか？」

「ああ、いいよ」

「そか。ほな、こつちや」

そう言って歩き出した少年に着いていく。

「今日は大商人の方々が来とつてな。災難やつたな」

「大商人？」

「おや、旅をしてんのにキース国の大商人様を知らんとは驚きやわ」

気になって聞いてみたが、返ってきたのは人によつては嫌味に聞こえかねない台詞だった。少年が言つと違つたが。

「バスツク公爵お抱えのアイーダ商会の事を、この国では大商人様と申し上げるんや。いつもあんように国中を巡つてな、どんな貧しい村にでも行つて、儲けよりも信用第一で動いとんのや」

「そうか」

少年が、さつき出てきたばかりの家の前で立ち止まつた。

「どうぞ、入つてや」

「お邪魔しまーす」

扉が開かれて中が見える。どうやら普通の民家のような。

ミアが無警戒に入つていき、その姿を見た俺と少年は苦笑した。

「旦那も苦勞なさるわな」

「そんなことは……まあ、あるかもな」

そう言つて中に入った。続けて少年も入つてきて扉が閉められる。ミアは、と搜してみると、この一つ目の部屋にはいなかった。

「奥の部屋やろ。旦那はその椅子に座つていてな。直に彼女は戻つてくるさかい」

自信たっぷりにそう言った少年は、部屋の隅にあった棚からカップを取り出す。

勝手に部屋を散策されたらたまったものではないだろうに、と思いはしたが、あまりにも自信たっぷりなのでおとなしく座って待つことにした。

少年は魔法陣の埋め込まれた板の上に三つのカップを置き、起動コードを呟いた。魔法陣と三つのカップが一瞬だけ光り、その直後にはカップの中に液体が入っていた。湯気が立っている。

それを少年が運んでくる。それと同時に奥から何かが崩れる音がした。

くすりと笑いながら少年がテーブルにカップを並べていると、ミアが戻ってきた。

「お嬢さん、大丈夫やったか？」

ミアはフラフラと歩きながら、俺の隣に座った。

「……本が……山になった」

夢見心地なのか天井を見つめていたミアは、そう言うとテーブルに突っ伏した。

もう一度少年がくすりと笑い、ミアの下に椅子を置く。

「お二人は、今日はここでゆっくりしててや。布団はあるさかいな」

「ああ、ありがとう。だが、ミアは一体」

「見たいんか？」

俺が頷くと、少年は立ち上がって奥に歩き出した。俺も立ち上がり後を付いていく。

そして一つ扉を過ぎて目にしたものに、俺は呆然とした。

「どや？ これで彼女が倒れた理由が分かったんやないか？」

少年は部屋の真ん中に立ち自慢気に両手を広げて、部屋を埋め尽さんばかりの本を示した。

ざっと題名を見回すが、それは『魔法解析理論』や『魔法大全』といった魔法の専門書が多かったが、中には『古ミナイス帝国建国記』のような歴史書も見つけられた。全てが文字だらけの本だろう。確かに、これならばミアは長くこの部屋にはいられないかもしれない。

戻るとミアはまだテーブルに突っ伏していた。

「おい、大丈夫か？」

そう聞くと、ミアは首から上だけをあげて

「もう……だめ」

と言ってまた突っ伏した。

ノイジと名乗った少年は、主に法陣魔法を使うようだった。これは触媒魔法の一種に分類され、魔法陣というものを触媒とする。

魔法陣とは、一般的には大気中の魔力素子（正式な名称は魔法力素粒子）を利用することで、起動コードのみにより魔法を使える触媒のことだ。

「旦那は、記憶が無いんか？」

突拍子もなく出た質問に、表面的には平静を装ったが狼狽した。記憶を探りどこで気づかれたのかを考えたが、見つからなかった。

「せやな、旦那がミアというお嬢さんと最近一緒になったことはすぐに分かったんやな。そやけど、何でそれを隠そうとしたのかわかって考えるといくつか考え付いたんやけど、旦那が“妙に”魔術に詳しいようやからそれも鑑みると、旦那の記憶が一部分だけ無くなったんちゃうか、と思ったんやな」

俺はちらとミアを見やり、未だにテーブルに突っ伏していることを確認すると、降参だという意味も込めて両手を軽く上げた。

ノイジは小さく微笑むと、さらに続けて言った。

「ここからは僕の勝手な想像なんやけど、旦那は異質な存在のはずなんや」

「異質な、存在？」

「せや」

ノイジはじつと俺を見つめる。

「旦那には、MTCが存在していない風なんよ。この世界の生き物すべてにはMTCが備わっているものなんやけどな、植物も含めて「エムテシー？」

「MTC、つまり魔力変換回路のことな、簡単に言ってしまうえば魔力素子^{マナ}を純粹エネルギー^{マナ}に換える回路のことなんや。個人的には古典魔法もこの部類に入ると思っではいるんやけど、どうも合理的な説明が難しいさかい。まあそれは色々^{マナ}と異論があるとしてもや、ほとんどの魔法はこのMTCに魔力素子^{マナ}を通すことで魔法を使うんやな」

そうだったのか、と俺の無知を恥じていると、服の袖が引っ張られた。ミアが起きたようだ。

「おにいちゃん、きよく、ないの？」

どうやら、聞かれていたらしい。

良い機会なので、これからしばらく旅で世話になるであろうミアにも一通りのことを説明した。

俺の記憶が無い事、ミアが最初に目にした人物であること、知識は残っていること。

ミアは最初は驚きの声を上げたものの、次第に落ち着いてきたようだ。

「やっぱりそうだったんだ」

震える声でそう言ったミアに以前と同じ疑問を感じた俺は、ミアを見やる。

対面にいるノイズは苦笑していた。

「どういう、ことだ？」

「えっ？」

俺がした質問の意味を理解していないのか、ミアは首を傾げる。やはり、ノイズは笑っていた。まるでこの状況を楽しんでいるかのように。

俺はミアに何でもないと行って、ノイズに質問することにした。

「ノイズは何か知っているのか？」

「知っているも何もな」

そこで言葉を区切り、俺とミアを交互に見る。

「偶然や」

第一話 出発

朝起きると、隣にミアが眠っていた。

まだ日が出ていないのか、部屋の中は薄暗い。

確か昨日は夕食をご馳走になった後、ノイジは奥の部屋に行つてしまい、二人でここで寝るように言われたのだった。

体を起こすと、椅子にノイジが座つて読書をしているのが見えた。

「あ、旦那、よく眠れたんか？」

「ああ」

自分がそう言つと、ノイジは本を閉じ、それをテーブルに置いて立ち上がった。

「お嬢さんはそのまま寝かしておくさかい。朝食の準備をするんでしばらく待っててな」

昨日の夕食で使つた調理台にお碗を乗せてその中に食材を入れ起動キーを言つと、あっという間に料理が完成した。

調理台にはいくつもの魔法陣が重ねて描かれ、起動キーにより様々な料理が出来るようになっていらい。

しばらくすると、三人分の朝食を作り終えたノイジは、テーブルにそれらを並べた。

「ほな、お嬢ちゃんも起きて、食べような」

そう言つてノイジは起動キーを言つたが、ミアには特に変化が起きていない。

ノイジを見てみると、少々驚いたものの何事もなかったかのよう

に食事を摂り始めていた。
俺もそれに倣って食事を始めた。

朝食も食べ終わり、そろそろ日が出てくるかという時間帯。
もそもそとミアが動いたかと思うと、目を開けて布団の上で正座をした。

「おはようございます」

そしてそう言ってそのままの姿勢で頭を下げた。青い髪がばさりと顔の前側に落ちる。

「おはよう」

「おはようさん」

俺とノイズが返事をする、頭を上げる。だが髪が顔にかかっていて表情が分からない。

しばらく家の中には外から聞こえてくる人の声や馬車の音だけしか響いていなかった。

太陽が完全に山端から顔を出した頃になって、ノイズが言った。

「お嬢さん、朝食、食べるか？」

首を左右に振ることで眼前にかかる髪を除けたミアは、一つ頷くと立ち上がって外に出て行った。
多分、顔を洗いに行ったのだろう。

「旦那、追いかけてええんか？」

ノイズに言われたことがすぐには理解できなかったが、ミアが戻ってこれない可能性があることに思い至ると、慌てて外に出た。

ミアが出ていってからしばらく経つが、すぐに見つかるだろう。

そう思っていた俺の予想は、目の前の光景によって脆くも崩れ去った。

行き交う人や馬車の波。多分これがノイズの言っていた大商人の人たちなのだろうが、この人数は想像をはるかに超えていた。それよりも、この村にこれだけの人数を泊められたものだ、と感心するほどだった。

俺は首を横に振り雑念を追い払うと、ミアを探すことに集中する。青い髪はそれほど珍しいものではないらしく、ちらほらとミアと同じ色の髪を持った人が通っている。

まずは兎に角、前に進もう。

「あれ、珍しい」

そう思った矢先のこと、突然声をかけられた。
きよるきよると周りを見回すが、声の主は見付けられない。

「下だよ。下」

そう言われて下を向くと、そこに青い少女がいた。

ミア、のように見えるが、口調は違う。

「お兄さん、ノイズのところに泊まってた人だね！」

「あ、ああ。そうだが」

「ミアちゃんなら大丈夫。私の後ろにいるから」

そう言って後ろを振り返った青い少女は、突然悲鳴を上げた。

「え〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！ いったいよ〜〜〜〜！！！！」

「誰がだ」

「ミアミヤミヤミヤちゃんだよ。さっきまで一緒にいたのにさ〜〜
〜！」

いちいち五月蠅い。

そんな事を思っていると、その青い少女はあっという間に駆け出していた。

慌ててそれを追いかけるが、すぐに見失ってしまった。

このままだと俺まで迷子になりかねないので、ノイジの家に戻る
こととした。

「で、その子は誰だ？」

「私はミツシエです。よろしくね！」

ノイジの家で待つことしばらく、今しがたミツシエと名乗った青
い少女がミアを連れて帰ってきた。こうして二人が並んでいると、
よく似ている。

彼女はノイジとは古い付き合いのようだった。

「ミツシエ、落ち着きや。五月蠅くてかなわんわ」

「ノイジこそその変な喋り方止めてよね。聞き取りにくいっいたらあ
りやしないんだからね！」

「この喋りはな、わいが苦労して本の中から発見した、極東の国の
喋り方なんや。せやから珍しくて、そんで人が寄ってくる。そした
ら本が手に入るかもしれへんのだ。こんなチャンス逃してなるか

い

「本本本本って、本当に役に立ってるの？」

「せやな。今までは立ってなかったかもしれへん」

そこでミツシエが胸を張ったが、続けられた言葉に首を傾げた。

「でもな、今日からは、役に立つんや。特にこのミアお譲ちゃんと旦那には、な」

俺とミアに役に立つ？

それは旅の仕方とかそういった事だろうか、と思っただがそれは違
うとすぐに首を横に振った。

ノイジを見ると、俺の様子を見てくすりと笑った。

「せやな。わいから言えることは少ない。少ないんやけど、ミアお譲ちゃんがここにいる理由も、旦那の過去も、だいたいの予想は
つくな」

「なにっ!？」

俺はついそう叫んだ。いや、叫ばずにはいられなかった。

「俺の過去を知っているんだな」

掴みかかる勢いでノイジに迫るが、対するノイジは落ち着いた顔
でこんな事を言った。

「多分、やな。確証も無いし、ほんまにそうなんかも知らん。ただ、
ミアお譲ちゃんと旦那の旅に、わいは付いていくさかい、確信が持
てるまで待つてもらえんか？」

俺は、それを聞いて引きさがつた。

今自分の過去を知っても、何が出来る訳でもない。それに、混乱するだけだ。

ノイジが付いてくるのだったら、もう少し色々と整理が付いた時に聞けば充分だろう。なぜだかそう思った。

だが反対に、ミツシエが掴みかかる。

「ちょっと、何考えてるの？ この村を出て行くって、何時、誰が決めたのよ。っていうか、最初からこの心算だったの？ 人を泊めるなんて珍しいと思ったけど」

「今、わいが決めたな。まあ、まずは落ち着きや」

胸倉にあるミツシエの手を、ゆっくりと体から離していくノイジ。ノイジの顔にある決意の表情に気圧されたのか、ミツシエは渋々といった感じで手を離れた。

「まあ、ミツシエには悪いかも知れん。けど、こん二人で旅が出来ると思うか？」

そう言われたミツシエは俺とミアを交互に見る。

そして、首を横に大きく振った。

「せやる。そやから、わいは二人に付いて行くんや。心配することはない。危険な旅になる事は、無いさかい」

ミツシエはノイジをしばらく睨みつけていたが、やがて微笑むとこう言った。

「気を付けてね。絶対帰ってきてよね。あと、出ていく時に、皆に挨拶していくこと。分かった？」

「了解や」

ノイジが笑顔で頷くのを確認したミツシエは、さっさと外に出ていった。

それからしばらくの沈黙は、ノイジが話し始めたことで終わった。

「突然あんなこと言って、すまん。せやけど、ミアお譲ちゃんと旦那にとっては、悪いことやないやろ」

俺は頷いた。

「旦那やミアお譲ちゃんにも、話さなあかん、というか聞かなあかん事はあるさかいな。まあ、今は旅の準備が先決や。詳しい事は、道中にもはなそうや」

「ああ、そうだ、な」

「うん」

雑貨店で保存食や丈夫な衣服などを買った。

ミアは袋に圧縮した服や食糧を持っていたので特に必要ないと主張していたが、さすがに不振に思われるとノイジに言われて、渋々服装を旅に合わせたものにしてたりバッグを購入したりした。

俺はもともと動きやすい服装をしていたが、所々擦り切れていたりしたので新調し、そして手頃なナイフを1本買った。なんとなくこのナイフを持っていると落ち着かなかったが、それでも持っていないよりはましだろう。

ノイジは家にあつた旅用の服を着て、ナイフを一つ買った。彼の手には使い古されたワンドが一本握られている。

「ほな、行こか」

そう言っつて、ノイジは俺とミアを引き連れて村を回り、一人一人に別れの挨拶をしていった。

一通り終わると、街道に出る所まで移動して、そこで待っていたミッシェや長老らしい人と挨拶を交わした。

「気を付けてね」

「もちろんや。ちゃんと帰ってくるから、待っててや。長老も、今までありがとうな。一通り終わったら帰ってくるさかい」

「気を付けるんじゃぞ」

「わかっとなるがな。そんじゃ、行ってくるわ」

踵を返して俺とミアに向き直ったノイジは、左手を突き上げてこっつ言った。

「出発やー！」

「しゅっぱいっ」

それに続けてミアが同じように左手を突き上げながらそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0017i/>

キース王国の一本道

2010年10月21日20時40分発行